

[要旨]

宗教経験論と脱文脈化 ——シュライアマハー『宗教について』をめぐって——

深澤 英隆

シュライアマハーの『宗教について』[1899]は、さまざまな意味で宗教思想史上の画期をなす業績である。同書においてシュライアマハーは、それまでキリスト教的伝統において、「神の経験的認識」(cognitio dei experimentalis)としてキリスト教的文脈に埋没していた経験概念を、キリスト教的文脈から切り離して論じた。またシュライアマハーにとって第一義的に問題であったのは、キリスト教でもキリスト教的神でもなく、「宗教」という一般概念で表される生の領域であった。そこでは宗教の概念が、キリスト教から決定的に切り離されて脱文脈化されているとすることができる。しかしこうした一方で、これらの脱文脈化の操作は、シュライアマハーにとっては同時にキリスト教の新たな形での正当化の試みでもあった。その意味で、宗教や宗教的経験の理念は、シュライアマハーによってキリスト教の伝統へと再文脈化されることになる。『宗教について』にはこのように、近代における宗教伝統の脱文脈化／再文脈化の複雑な動態をうかがうことができる。